

## P9 北海道における近代捕鯨の一先駆者と加賀地方の伝統捕鯨

平口哲夫（金沢医科大学）

A pioneer of modern whaling in Hokkaido and the traditional whaling in Kaga district.  
Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University).

北海道の商業捕鯨は、安政 5 年（1858）、ロシアの南下を警戒した幕府の蝦夷地防衛策の一環として、房州勝山藩の醍醐組が函館奉行の要請のもとに函館に渡り、捕鯨船函館丸に乗って試漁したのが始まりである。しかし、醍醐組によって先鞭がつけられた北海道捕鯨は、維新の大混乱の中で打ち切りとなり、醍醐組それ自体も莫大な損失をこうむって明治 2 年（1869）に廃業に追い込まれてしまった。

零細化した房総捕鯨に再興をもたらしたのは、明治 25 年（1892）千葉県館山に製造工場を持つ捕鯨会社を設立し、アメリカ式の洋上捕鯨を試みた旧加賀藩士、関沢明清（1843～1897）である。一方、同藩出身の斉藤知一（1861～1923）は、旧加賀藩士族の授産事業のために設立された起業社に加わり、明治 17 年（1884）胆振国室蘭・有珠両郡で捕鯨を試みるが失敗。翌年、起業社は事業不振の打開策として岩内港を根拠地とする捕鯨を営むことにしたが、この試みも漁民の妨害にあって失敗、事業撤退を余儀なくされた。しかし、知一は断固として踏みとどまり、明治 19 年（1886）天塩国での捕鯨の特許権を得て、翌年、天塩国羽幌にて漁舟 4 隻、漁夫 24 人を使って捕鯨を開始した。明清が水産局に捕鯨を進言し、国費で捕鯨帆船を伊豆大島に出して 2 頭の鯨を捕獲したのは明治 20 年（1887）のことだから、相前後して二人は別々のルートで捕鯨に携わることになったわけである。

さて私は、1982・83 年に石川県真脇遺跡から多量に出土したイルカ骨の整理に携わり、その作業が一段落した 1985 年 2 月に（財）日本鯨類研究所を訪問して以来、同研究所発行の『鯨研通信』を愛読するようになったが、そのバックナンバーに掲載されている「北海道で鯨を捕った男の話—斉藤知一の捕鯨時代—」（第 339 号、1981）と「続・北海道で鯨を捕った男の話—斉藤知一の捕鯨業時代—」（342 号、1981）を読んだのが「斉藤知一」との最初の出会である。著者の中村春江（1926～2000）は斉藤知一の姪に当たり、『北海道で鯨を捕った男 斉藤知一伝』（あすなろ社、1985）という著書も出しているが、出版当時、私の関心は古いほうに傾いていたので、その本を手に入れることはせず、知一の足跡を訪ねるようなこともしなかった。しかしながら、次第に捕鯨史・捕鯨文化全体に関心が広がり、2002 年から 5 ヶ年計画で始まった日本伝統捕鯨地域サミットの会議に参加するようになったことも手伝って、知一関係の資料に当たる必要を感じるようになった。

2005 年 5 月 15 日に下関で開催された第 4 回伝統捕鯨地域サミットでは、「近代捕鯨の先駆者と加賀・能登捕鯨の伝統」と題してトピックスを提供した。その準備のために知一ゆかりの曹同宗慈船寺（金沢市材木町 19-5、旧町名は備中町）を訪ねたのは 5 月に入ってからのことであった。境内には大正 14 年（1925）建立の「斉藤知一君碑」と「斉藤知一君碑辞」とが並在し、私が訪ねたときは、寺の修築に合わせてこの碑の位置を変える工事中であった。私が 2 年前に新居を構えた金沢市小將町から歩いて 10 分ほどの所に慈船寺があることを知り、あまりの近さに我ながら驚いた。しかも私の妻は幼少のころにこの辺りに住んでいたというのであるから、鯨がとりもつ「不思議な縁」（学会発表にはふさわしくない表現かもしれないが）を感じた次第である。

本発表では環境・民族考古学的な視点を中心に、「日本の捕鯨史から見れば忘れられたような存在」である「加賀百万石」の国から「日本の近代捕鯨をつくりあげた人物」が輩出したのは「不思議」（矢代嘉春、1983）ではない、ということ述べることにしたい。